

ひとりのカレンジャー

「とりの子なきし」というカレンジャーが来た

一月がら見てみよ

たしか人が見れば景色がよい

とりの見を景色はこんな向に見えよや

人で付^考まつかのり

よく視点をかえてやる

と言つておろすか

右をでるの

言ひところか船の視点は

とりのような視覚の感覚は思いつかぬかも

しれぬ

とてまごのどと者がかせよとよ

人は自分の考えにとよみよとよとよ

これお正しいと思つてしやう

おはちかろとそれおれそつ思つてよ

おち

とりのようには言ひ位置ごの存るがよと

それはおごいと言ひ位置は目お解くか

しれぬ

とりの子にさし
 毛かいた人
 きつと居るが
 音り 伝書かもし木片の
 これかろうの世の中は
 このようか知ると
 思つての 絵心と思われ
 かしこ分一けわりで音
 ちよつとしんさし絵心も
 いらんが思ひが
 こもつていら
 生活の中で見ゆかして
 いることも なくさ
 らかもし木片の
 たんや、伝書と思つても

実何こつなり
 と言えそのものが
 世の中のものなり
 キヤツ 出着るも
 思つてら かくすかれ
 入小のけ
 まつてい 音り
 注意して見ること
 知らる

2022
11/13